

【研究調査報告】

非行防止はいかにして実現したのか

久保 秀雄

社会安全・警察学研究所 所員
京都産業大学法学部 准教授

はじめに

社会安全・警察学研究所の久保と申します。よろしくお願ひします。お手元に両面印刷されたA4サイズの資料を1枚お配りしています。スクリーンに投影するスライドと同じ内容になっています。両方をご参考にしてお聞きいただければと思います。

私の報告では、長者先生はもうご退職されたあとでしたが、実際に学校現場を訪問・見学し調査した経験を踏まえて、長者先生が始められた取り組みがどうしてうまくいったのか考察した成果について、要点だけにはなりますが、述べていきます。

この報告の目次をお示ししておく、まずⅠで「調査の概要」について簡単に触れます。次にⅡで「調査の成果」として、長者先生がお話されたことは割愛いたしますが、私たちも色々たくさん得たことがありますので、重要な点に絞ってですが、どのようなことが分かったのかということをご紹介します。そして、最後にⅢの「考察」ということで、研究者らしく考察を加えてどのようなことが言えるのか、もう少し具体的に言うと、成功の秘訣は何だったのか、これだけ修学院中学校の立て直しがりうまくいったのはなぜなのか、考えられる理由についてお伝えします。

Ⅰ 調査の概要

調査対象選定の経緯

では、まず「調査の概要」についてです。私たちが修学院中学校を調査するようになった経緯を説明いたしますと、当研究所を設立したとき、「子どもと安全」、特に「非行防止」や「立ち直り支援」が研究テーマとして設定されました。そこで、テーマに関する調査研究を自分たちで進めて行くにあたって、子どもたちの活動場所の中心である学校に注目する必要があるだろうという話になりました。また、様々な機関の連携にも着目したいという考えがありましたので、ちょうど学校は様々な機関が連携する窓口になることがあるので調査対象として適切だろうという話にもなりました。そうした考えから、京都市教育委員会にお話を伺いに行きました。そのとき、教育委員会で窓口となって下さったのが、本日もお越しいただいている大橋忠司先生でした。

大橋先生からは、そういうことであれば、ちょうど良いところがあります、修学院中学校と嵯峨中学校というところで、ぜひ行ってください、太鼓判を押せますから、とご推薦をいただきました。そこで、大橋先生にご紹介頂き、両中学校とそれぞれの校区にある小学校、とはいっても、メインの調査対象となったのは中学校だったのですが、学校現場を訪問し普段の授業から様々な行事まで見学いたしました。また、あわせて関係者の皆様にインタビューなども実施いたしました。

調査のメンバー

いずれの学校でも興味深い取り組みがたくさん見られたのですが、とりわけ修学院中学校は、非常に悲しい殺人事件があった中で、驚くほど良い学校に生まれ変わっていました。また、修学院中学校については、幅広く地域の人たちにもインタビューできたり、卒業生のお話も聴いたりすることができたので、修学院中学校を中心として研究が進んでいくことになりました。

調査にあたった中心メンバーは、今日は授業があり参加できないのですが浦中千佳央先生、そして司会の成田秀樹先生と私になります。また、私たちは法学畑の人間ですので、教育学がご専門である京都聖母女学院短期大学の平阪美穂先生や、京都産業大学の卒業生で在学時から教育関係のNPO活動に関わってきた釜場正起さん、そして京都産業大学でキャリア教育に携わる専門職員である大谷麻子さんにもご協力を仰ぎ、一緒に調査活動を担っていただきました。

なお、キャリア教育に携わる大谷さんにご協力いただいたのは、修学院中学校も嵯峨中学校も、いわゆるキャリア教育を活用して地域との連携を積極的に進める取り組みを通して、学校の立て直しに成功したからです。ちなみにキャリア教育というのは、実は私も関わっているのですが、生きる力を養うというか、すごく簡単に言うと、進路指導の延長線上に発展してきた生き方教育になります。そして、生き方教育を行うために、大学であれば地域以上に産業界と連携した教育を行っています。両中学校とも、そのようなキャリア教育をうまく活用されて立て直しに成功したところでした。

II 調査の成果

地域との連携

では次に、どのような調査成果が得られたのかお話しします。先ほどニュース映像が流れましたが、生徒さんたちが会社をつくって出店しているバザーを実際に見に行きました。驚いたのは、地域の人に学校の中に来てもらうのではなく、近隣の商店街に机を持って出て行くという点です。先生方がもちろん見守りはされていますけれども、叡山電車の踏切を横断して東西に長く伸びている商店街に生徒さんたちがそれぞれ散らばって、当たり前のように店先に出店していました。ニュース映像にも出ていましたが、そうやって商店街で地域の人たちと普通に交流しているのです。このように、自分たちで会社をつくって地域の商店街と連携した活動を行うキャリア教育が実施されていました。

どのような商品が売られていたかと言いますと、たとえば、修学旅行で沖縄に行ったので、沖縄のハブのおもちゃを作って売っているような会社がありました。修学旅行での学びの成果を、そのようにつけていました。

また、こんな興味深い光景も見られました。私たちは朝の開始時からバザーを見に行ったのですが、昼過ぎになると売れるところはすごく売れて完売してしまうので、だいぶ閑散としてくるエリアも出てきます。すると、吹奏楽部の生徒さんでしょうか、何人が集まってきて自分たちで路上ライブを開き、もう一度そのエリアを盛り上げていました。路上ライブが開かれると、人がたくさん集まってくるようになりましたので。私たちはカフェで休憩しながらそうした一連の光景を見ていたのですが、先生から言われたからではなく、生徒さんたちが自分たちで自発的に判断して声を掛けあいながら取り組んでいました。

他にも印象に残ったこととして、あいさつがあります。私たちは何度も訪問していて顔見知りになった生徒さんもいますので、バザーのときも商店街を歩き回っているとあいさつをよくしてくれました。ただ、バザーの時だけでなく、とにかくどんなときに訪問しても、どの生徒さんたちも積極的にあいさつをしてくれます。これはすごいことだと率直に思いました。普段から地域の人たちとの関わりがあったりして、大人慣れしているとも感じました。

授業に取り組む姿勢

学外の大人との交流に慣れているからか、生徒さんたちが物怖じしないのも目についた特徴です。体育館で学習成果の発表会をするようなときも、地域の人たちや保護者などが体育館に聴衆として参加しているのですが、中学生のレベルをはるかに超えるようなプレゼンを堂々と行っていました。

また、授業見学に行っても、こちらのことをあまり気にせず授業に集中しています。ところが、比較のために修学院中学校や嵯峨中学校ではない他の中学校も訪問しているのですが、他の中学校に行くと生徒さんが物珍しさからずっとこちらを見ていたりすることがあるのです。私たちが行くとかえって授業の邪魔になってしまうのですが、修学院中学校ではそれが全くありませんでした。これが本当に驚きでした。

このように、バザーや発表会といった行事だけではなく、授業にもしっかり取り組んでいますので、それがこの中学校の魅力ですということを、当時の教頭先生がおっしゃっておられました。成績も向上し続けているそうです。

調査のなかで、授業にしっかり集中して取り組んでいることが分かるエピソードに恵まれましたのでご紹介いたします。私ではなくて、大谷さんが見つけたのですが、それは、公開授業のときのことでした。音楽の授業には、他の中学校の先生も、参考にといいことでしょうか、見学に来られていました。その他校から見学に来られた先生は、授業をご覧になって「何でこんなに切り替えが早いのか」と驚かれたそうです。それに対して、修学院中学校の先生は「そうなのですよ、この生徒ならではなのです」と応答されたそうです。

すぐに授業に集中できる凄さについては、他の中学校と比較すると、一目瞭然ですぐに分かると思います。私も何度か授業を見学しましたが、当然ながら休み時間は騒いでいます。ところが、授業が始まると、そこからの切り替えがものすごくスムーズでした。たとえば、3年生のあるクラスでしたが、チャイムが鳴ると生徒たちはすぐに着席し、先生は何も言わずにただプリントを配るだけです。すると、生徒たちはすぐに配られたプリントの問題を解き出します。大学でもここまで素早い切り替えはなかなか目にしないな、と思いながら見ていました。

切り替える力

京都産業大学は日本で最も先進的にキャリア教育に取り組んできた大学であることを売りにしています。本日も、経営学部の名誉教授で大学のキャリア教育をこれまでずっと引っばってこられた後藤文彦先生がお越しくださっています。その後藤先生と私が大学生を対象とした共同研究の成果として、「切り替える力」の養成がキャリア教育のみならず教育全般でどれだけ大事か、この力が色々なところに効いてくるということを実証的に示した論文を公表しています。ちょうど公表したばかりの統計的な研究で、精神分析・療法の知見を踏まえたものになります。抜き刷りを何部か今日持ってきましたので、入り口のところに置いておきます。もしご関心があればお読みください。また、大学のWebサイトから無料でダウンロードできるようにもなっています。

その論文の中でもっと詳しく説明していますが、切り替える力を身につけることは本当に大事です。その力を、修学院中学校の生徒さんたちは間違いなく身につけているので、すごいことだなと思いました。

さらに、修学院中学校の先生方によれば、生徒たちの間でいざこざはあつたりするけれども、生徒同士で問題を解決することができているそうです。先生にはあとで報告するだけで済み、いちいち目くじらを立てて介入する必要がない状態になっているようです。だから、怒鳴って指導する必要がないわけです。たとえば、私たちも全校生徒が集まる新入生歓迎会に来賓扱いで参加させてもらったのですが、先生方がどのようにされているのかずっと観察していたところ、いちいち注意したりしているわけではないのですね。全校生徒が体育館に集まっていますが、特に注意してまわったり監視してまわったりする必要がなく、前で行われているパフォーマンスを一緒になって楽しんでおられました。

また、当時の校長先生がこのようなことを言っておられました。「うちの生徒はすごいです。この前、『先生、すみませ

ん』と謝ってきました。なぜ謝るのかと聞いたら、『塾に持っていったカバンに携帯電話を入れたまま間違えて持ってきました』と答えて、ものすごく反省していました。そういったかたちで、自分で自律して行動できるようになっている、ということをおっしゃっておられました。

もちろん、問題が全く何もないわけではなく、私たちが調査に伺ったときも「すみません、緊急に対応しなければいけない案件が出てきましたので、今日のインタビューはここまで」といったようなことがあったりしました。けれども、別の時に、あの件はその後どうなったのかお伺いしたところ、大した問題にはならなかったようです。ですから、総じて現状でもうまくいっていると良いように思います。

Ⅲ 考 察

パーソンズの理論

本学の職員さんに、修学院中学校の近隣にある中学校を10数年前に卒業した方がおられます。その方に、「修学院中学校にはどういうイメージをお持ちですか」とお伺いしたところ、「あそこはヤバイところです。京都でナンバーワンと言われたぐらい大変なところだったのではないですか」というお答えが返ってきました。そこで、私が「今は違いますよ。別の意味でナンバーワンです」ということを言うと、信じられないと驚いておられました。では、なぜここまで変貌することができたのでしょうか。その点についての考察を、最後に述べていきます。

考察するにあたって参照したのが、20世紀を代表する社会学者タルコット・パーソンズの理論です。パーソンズは「秩序はどうして成り立つのか」という問題を中心に、壮大な理論を組み立てた人なのですが、壮大過ぎて最近ではかなり敬遠されてしまっています。ただ、非行防止や学校の立て直しは、まさに学校でどうやって秩序を成り立たせるのかという問題になりますので、今回の研究テーマにジャスト・フィットしているということで参照しております。

理論の背景

まず、パーソンズの理論が、どのような背景から生まれたものなのかについて簡単にご紹介しておきます。

パーソンズの理論はどんな社会現象にも幅広く適用できるほど壮大ですが、それだけ壮大な理論を組み立てようと思っただけなら、素材となる研究がたくさん必要になります。その素材となるたくさんの研究をもたらしたのが、第二次世界大戦でした。第二次世界大戦は総力戦と言われた戦争ですから、多額の研究費が投下されました。そうした中で、アメリカ政府のコンサルタントとして対独・対日戦略の立案に深く関わる中心的人物となっていたのがパーソンズでした。他にも様々な研究者が関わっていた中で、パーソンズは人文・社会科学の諸分野を横断して様々な知見を総動員してまとめ上げました。だからこそ、彼の理論は壮大なのです。

精神的緊張

そんなパーソンズが着目したのは、心に過大な負荷がかかり精神的緊張を強いられる事態です。それがナチスの台頭をもたらした重要な要因であると考えました。

ドイツは、第一次世界大戦の敗北によってこれまでの体制が瓦解し急激な変化を被ることになりました。そうして人々は強い不安に襲われ、精神的に緊張が高まる状況に追い込まれました。急激な変化は、集団レベルではなく個人のレベルで考えると、身体の急成長に心が追いつかず精神的に不安定でまさに非行のような逸脱行動が頻発する思春期が一番典型的ですが、戸惑いと不安をもたらすことになりがちです。

不安で精神がピリピリとはりつめる状態にずっと置かれるのは大変辛いことです。ですから、不安から解放されるよう

心の抛りどころとなるものを求めて、ダーク・ヒーローでも反逆者でも何でもよいのですが、力強そうなものにすがりたくなります。こうした依存欲求は、言ってみたら赤ちゃん返りで、退行にあたるものです。そうした依存欲求の高まりから、威勢の良いナチスへの陶醉・帰依が若者を中心に広まったのだと、パーソンズは考えました。

また、心がはりつめた緊張状態に置かれているということは、フラストレーションが溜まるということです。その溜まったフラストレーションは、しばしば攻撃性の発揮というかたちで発散されます。だから、スケープゴートとなるユダヤ人を虐殺する行為が発生しているのだと、パーソンズは考えました。しかも、フラストレーションが溜まっているので、その攻撃性はとどまることを知らず、ナチス内部で熾烈な内部抗争まで引き起こしてしまいます。ちょうど、荒れた少年たちが地域社会に迷惑をかけるだけでなく、仲間内で殺人を起こしてしまうことがあるように。だから、ナチスという暴力的な集団は、要するに思春期の少年たちが集まる少年ギャングと一緒なのだ、パーソンズは指摘しています。内に対しても外に対しても攻撃的で暴力支配を行うところが両者の共通点で、そうした暴力集団が力を振るう事態にドイツは陥ってしまった、人権尊重や法の支配を欠くギャングに支配されているのだ、とパーソンズは理解しました。そうした研究を踏まえて組み立てられているのがパーソンズの理論で、その理論を参照して今回の調査成果を分析してみました。

規範意識の共有

さて、寄り道しましたが、ここから本題になります。パーソンズの理論の要点を簡単にまとめると、次のようになります。

少年ギャングの支配にせよナチスの支配にせよ、法の支配を欠く秩序なき状態をどうやったら改めて立て直すことができるのか、つまり人権を尊重する価値観や規範意識が広く共有される状態への移行はどうすれば実現できるのか。これが、アメリカ政府のコンサルタントとして、ドイツ社会を立て直す再建策を立案していたパーソンズの実践的課題だったのであり、その実践に携わる中で彼の理論は打ち立てられたのでした。

規範意識については、長者先生のご講演の中にも出てきました。また、文科省の国立教育政策研究所の生徒指導研究センターというところが、このようなかたちで規範意識を育む生徒指導体制に関するマニュアルを作っておられます。もっとも、私が見るところ長者先生の取り組みは、このマニュアルに登場するものとはかなり異なります。しかし、パーソンズの理論を参照すると、長者先生の再建策は大変理に適ったものであることがよく分かります。

もともと暴力を振るいがちな荒れた人たちは、精神的に安定しておらず色々とフラストレーションを抱えていて攻撃性が高まっていると考えられます。そのような人たちに罰で脅して抑えつけるだけの攻撃的な対応をとると、彼らは攻撃を受けるわけですから不安や緊張が余計に高まりフラストレーションがさらに溜まったりして、攻撃的で反抗的な態度をブーメランのように返してくる可能性が高まります。そして、ブーメランのように返ってくると、こちらも当然嫌です。イヤッとしますから、同じように攻撃的になってしまいがちです。すると、相手に攻撃的なメッセージが伝わって、相手方もさらに攻撃的になるという悪循環が起こってしまいかねません。ですから、このような悪循環を回避するために、関わり方はデリケートとでなければいけません。懲罰ではなく教育ベースで関わるなければならないのです。

そのような関わり方が必要となるのは、少年ギャングの更生だけではなく、ドイツの再建でもそうである、というのがパーソンズの指摘するところです。第一次大戦のときは敗戦国ドイツに対して懲罰的な措置がとられましたが、結局、ドイツの逆恨みを買ってしまったような事態になり第二次大戦が起きてしまいました。だから、第二次大戦のときは、ドイツに対して懲罰ではなく教育ベースで関わる占領政策を実行しなければならない、そうパーソンズは主張しました。それが、人文・社会科学の様々な研究成果を分野横断的にまとめあげた理論からパーソンズが導き出した答えなのでした。個人レベルであれ集団レベルであれ、様々な研究によって示されている共通の法則なのだ。

また、非行少年もそうですしドイツという国もそうですが、彼らは逸脱していても結局はこの社会と一緒に共存してい

かなければいけない存在です。だから、社会の一員としてふさわしい役割をこなせるようになってもらうために、教育的に関わらなければならないのです。そのために、長者先生のご講演で最初に出てきましたが、威圧的に抑え込むのではなく、カウンセリング的な関わり方をする必要があります。パーソンズもまさに指摘していますが、そのような関わり方が、規範意識の共有をうまく図り立て直しを行うための秘訣になります。

ケアを行う姿勢

では、カウンセリング的な関わり方がどういうものなのか、もう少し詳しく見ていきましょう。3点に分けて説明します。まず1点目は、不安や緊張が高まっている精神状態へのケアをしっかりと行う姿勢が求められるということです。誰でもそうなのですが、大学生なら就活が一番分かりやすい場面でしょうか。「このままずっと就活などせずに大学生をやっていたい」という本音をよく聞きます。誰しもあることです。次のライフステージに移行する、つまり「急激な変化」を経験するというのは、一方で成長のステップとして憧れの気持ちをもって待ち望まれることもあります。一方で不安をもたらすフラストレーションを生じさせるものです。だから、そうした急激な変化がもたらす緊張に耐え先に進めるようになるためには、まずは土壌作り・土台作りとして精神的安定の確保が必要になります。不安を払ったり緊張状態をほぐしたりするようなケアが求められたりもします。こうした関わり方がまずは必要になると、パーソンズの理論は示しています。懲罰的対応をとって相手の精神状態をさらに悪化させてしまうのではなく、心のケアをまず提供する必要があるということです。そのように土台づくりをしておかないと、規範意識の共有を図ろうにもあまり効果がないと考えられるのです。

ここで、お配りしているお手元の新聞記事をご覧ください。長者先生が取り上げられている新聞記事の一番下の段に、長者先生が「力の指導から心の指導へ」と方針を転換したきっかけはカウンセラーの一言だったと紹介されています。ご講演の中でも冒頭で、そのようなお話をされていました。また、発達心理学の実験についても映像でご覧いただきました。ハリー・ハロウ博士の実験です。親が見ていると安心して、そうした土台があるから外に出ていくことができます。しかし、親との関係が十分に築けなかった子どもは、精神的安定が確保できていないので、閉じこもって次のステップに行けない、移行できませんでした。こうした実験結果も長者先生は参照されています。そして、以上のような専門的な知見を踏まえて長者先生がどう行動されていたのかが、新聞記事で紹介されています。「頭ごなしにしからない、常に温和でいることを心掛けている」というところです。このように、理論上の要点をしっかり押さえた対応を、つまり土台づくりをしっかりされておられたから、様々な取り組みが効果をもち、学校の秩序をうまく再建できたのではないかと考えられます。

成長の後押し

次に2点目です。ご講演の中でいくつものユニークな取り組みが紹介されていましたが、長者先生は、単にケアを行うだけではなく、成長の後押しもされています。相手に迎合しているのではなく、あくまで成長を後押しする支援的な関わり方をしています。甘やかして依存させるような、赤ちゃん返りのような退行をさせる関わり方ではないことが重要な点です。これもパーソンズの理論が強調している点です。土台づくりだけでなく、その上に建てる柱もたくさん提供していたと言えるでしょうか。

心のケアを行って精神的な土壌が整えば、色々な挑戦がしやすくなります。成長したいという願望や意欲は誰しもあるものですから、そうした願望や意欲が不安を上回るような支援をすれば、尻込みすることもなくなるという訳です。修学院中学校では、たとえば学校に来てもらうのではなく生徒たちがむしろ商店街にうって出るという、かなりハードルの高い課題を当たり前のようにこなすことができていました。

もちろん、そうなっているのは生徒たちを惹きつける魅力的な課題になっているからでしょう。やりがいがあって、自

信をつけて自尊感情を高められるような。その点でキャリア教育をうまく活用されていました。成績評価が段階別に行われる英数国理社のような主要教科だけでは、よりたくさん生徒に自信をもってもらうようになるには不十分ですから。その分、先生方は手間暇が余計にかかって大変だとは思いますが。

ただ、認知症サポーターの養成講座は、先生方ではなく地域の方々が運営を担当しておられました。地域の方々の中にはもう何年も担当されているベテランの方もおられます。終わったあとに振り返りを行う運営担当者の反省会にも参加したのですが、さらにレベルを上げるためにはどうすればよいのかといったことを真摯に検討されておられました。地域とうまく連携して、お任せできる場所はお任せしているのが、優れた仕組みであると思いました。

感情的なコミットメント

最後に3点目です。1点目のケアを行う姿勢や2点目の成長を後押しする支援的な関わり方は、要するに「あなたの味方になるよ」という関わり方と言えます。「あなたの味方になるよ」というポジティブなメッセージは、修学院中学校で生徒指導を現在担当されている先生がすごく強調して打ち出されています。

すると、そのように好意的に関わる中で生じてくるのが、理論的に言えば「愛着」になります。自分の味方になってくれる先生をはじめ何かと支援してくれる地域の人たちや、自分にとって挑戦となる様々な取り組みに、愛着をもって関わるようになるということです。愛着は、感情的にコミットする、心から関わるようになるということなので、強力な動機付けになります。パーソンズは様々な分野の研究の成果を踏まえて、そう指摘しています。

私も大阪の出身なので人権教育をだいぶ受けてきましたが、大事だということを頭で分かっているのと、心から大事だと思えることは、また別の話です。正論を唱えるだけでは不十分だったりします。しかし、長者先生の取り組みは、こうした問題もクリアするものであったことが容易に確認できます。今日はお時間の都合上カットされたと思いますが、文科省の人権発表会でのエピソードをご紹介します。人権発表会で、生徒たちは、自分は幸せの感情を感じるし、先生を含め周囲の人たちにすごく感謝の気持ちが生まれてきた、という内容の発表をしていました。まさに、長者先生が心がけておられる「心の琴線に触れる」指導の賜物だと考えられます。このように、感情的なコミットメントを引き出せる生徒指導であったからこそ、建前ではなく心から人権を大事だと思える規範意識をしっかりと共有するような生徒たちが育つ、そういった学校づくりができたのではないのでしょうか。

おわりに

結論ですが、理論的に見ると、驚くほど要点をしっかり押さえた取り組みを長者先生はされています。そのような取り組みは、独特なものなのかもしれません。文科省が配っている生徒指導マニュアルなどとは、かなり違うところがあります。しかし、理論的に見ると、学校の秩序を立て直すために見事に適切な取り組みをなさっていたと言えるでしょう。

特に、ケアを行う姿勢については、意識しないとついつい怠りがちになってしまいます。自分たちは正しいことをやっている、良いことをやっている、生徒のためになることをやっている、教える側は私もそうですがついつい思ってしまう、相手の事情を無視して押し付けてしまうことになりがちです。しかし、相手にとっては、今の精神状態では少し待ってほしいというか、むしろ迷惑なだけかもしれません。西院中学校の話で出てきましたが、ハードルが高いことを押しつけられるだけだと、生徒はついていけなくなり、教室に入りたくなくなるというようなことが起こってしまいます。ただ一生懸命やればいいのではなく、相手の事情も考えなければいけません。単に一生懸命やるだけだと、無意識に自滅スイッチを自分から押しつけてしまい、相手には攻撃的だと受け取られ、反発を招くだけで終わってしまうかもしれません。すると、教員も「こっちは一生懸命やっているのに何なのだ」という感情を意識的にも無意識的にも持ってしまうから、生徒

の悪口を言いたくなりますよね。


そうした点に注意を払わなければいけないと、私が生まれる前から京都産業大学で教鞭をとりキャリア教育をリードしてこられた後藤先生も強調されています。今やキャリア教育は色々なところで実践されていますが、うまくいかないことがえてしてあります。なぜうまくいかないのでしょうか。後藤先生も強調されておられますが、カウンセリング・マインドをもって良い関係を築くことがやはりできていなかったからではないのでしょうか。後藤先生の長年に渡る実践と研究を参照しても、成功の極意は教員がまずはしっかりと土台を築くこと、つまりカウンセリング・マインドをもって学生との間に良い関係を築くことになります。パーソンの理論と全く同じことを指摘されておられます。

もちろん、このようなことは言われてみたら何ということはないのですが、でも、これがなかなか簡単ではないというか、実際にできているところはそう多くないように思います。逆に、その点をしっかりと押さえることができていたから、修学院中学校ではこれほどうまくいったのではないかと、それが成功の理由だと言えるのではないのでしょうか。

また、単に正論としてお題目として人権尊重を唱えるだけにとどまらず、実際に日々の関わりの中で人権を尊重する関わり方を自ら実践し、生徒も実践する状況を作りあげることができたのも、そのような良い関係づくりができていたからだと考えられます。小学生や高齢者の見守り活動がうまくいっているのは、普段から生徒たちが先生方に大切にされている、好意的に味方となって後押ししてもらっている、そういう土台があったからでしょう。だから、生徒たち自身も、周りの人を積極的に大切に、地域の人たちと良い関係を進んで築けるようになっていないのでしょうか。そうした良好な関係を築くことができていたら、当然ながら悪さなんてしないでしょう。それが非行防止、ひいては学校の再建・立て直しに成功した重要な要因であると、理論を参照すれば指摘できます。以上が私の報告になります。

〈一同 拍手〉

成田：ありがとうございます。これから休息に入りますが、当初の予定では15時45分からパネル・ディスカッションでしたが、少し進行が遅れていますので10分強の休憩とし、15時50分からパネル・ディスカッションを開始させていただきたいと存じます。それでは休憩に入らせていただきます。


京都産業大学
 KYOTO SANGYO UNIVERSITY

【研究調査報告】
非行防止はいかにして実現したのか

社会安全・警察学研究所
 久保 秀雄（法社会学）

本報告の目次

I 調査の概要
II 調査の成果
III 考察
 (1)理論 (2)背景 (3)要点 (4)結論

2

I 調査の概要

3

- 京都市教育委員会からのご紹介
 - 京都市立 修学院中学校と 嵯峨中学校 を中心に
 - 2013年度末から2015年にかけて総計30回ほど訪問
 - 主な訪問者は所員（浦中、成田、久保）と研究協力者（聖母女学院短期大学・平阪美穂先生、卒業生・釜場さん、専門職員・大谷さん）
- 4

II 調査の成果

5

一乗寺バザー（地域に出ていく！）




京都起業家教育推進事業ユースチャレンジ
 (<http://www.entreplanet.org/YouthChallenge/>)

6

- 生徒たちが自ら積極的に取り組む姿勢が目立つ
 - 訪問者に対しても、とにかく積極的に挨拶してくれる
 - 訪問者慣れしている。大人との交流に慣れている
 - 物怖じせず、発表のレベルも高い
 - 行事だけでなく授業もしっかり取り組むところが魅力で、成績も向上している
- 7

- 公開授業を見学した他校の先生が驚く
「何でこんなに切り替えが早いのか？」
「そうなんです。ここの生徒ならではのよ」
 - 集中力の高さが比較すれば一目瞭然
 - 自分たちで問題を解決できるので、先生には後で報告するだけで済む（＝自律できている）
 - 怒鳴って指導する必要がない（＝関係が悪化しにくい）
- 8

Ⅲ 考察

9

(1) 参照する理論



Talcott Parsons (1902-79, 米)

20世紀を代表する社会学者

秩序はどうして成り立つのか？

… 非行防止の実現も含む

10

(2) 理論が生みだされた背景

- 第二次大戦時に対独・対日戦略の立案・実践に関与
- 人文・社会科学の諸分野の知見を総動員した成果
- 着眼点 = 急激な変化がもたらす不安(精神的緊張)
- 安心を求めて権威へ帰依・依存(自律の放棄) = 退行
- 不安への防衛機制として攻撃的に ≡ **ギャングの抗争**

11

(3) 理論の要点

- どうすれば人権を尊重する価値観・規範が共有されるか
- 関わり方が重要(占領政策も懲罰ではなく教育で)
 - … 反抗によるブーメラン(攻撃しあう悪循環)を回避
- 威圧ではなく、**カウンセリング的な関わり方**が秘訣
 - … 個別療法でも集団療法でも同じように通用する

12

①不安など精神的緊張へのケアを行う

変化・移行・成長は常にフラストレーションを生じさせる
耐えられるように、まずは**精神的安定の確保**が必要

↓

カウンセラーの一言が転機 **発達心理学の実験**を参照
頭ごなしにしない 常に**温和な笑み**を浮かべている

13

②迎合ではなく成長を後押しする

依存・退行よりも成長への意欲が上回るよう**支援**する

↓

成長につながる**魅力的な課題**を豊富に提供

(段階別評定を行う主要教科だけでは不十分)

手間がかかって大変だが、地域の協力でカバー

14

③愛着のある関係が強力な動機づけとなる

「正論」を唱えるだけや押し付けるだけでは動かない
関わる相手・課題への**感情的コミットメント**が梃子

↓

文科省人権発表会等での生徒たち「**幸せと感謝**」
「**子どもの心の琴線**に触れる」ことを常に目指す

15

(4) 結論

- 理論的に見ても、要点を見事に押さえた実践
 - : ①は**意識しないと怠りがちで、無意識に自滅**することも
- **実際に人権を尊重する関わり方**を一貫して実行
 - : 日々の生徒指導から小学生・高齢者の見守り活動まで
大切にされるし大切に**する関係を実現 ⇒ 非行防止**

16